大学生の性に対する知識に関する調査

－低用量ピルに着目して－

大田　真悠　（　金沢大学　）

１．目的

女性のライフスタイルの変化により、生涯の月経回数が増加している。つまり、月経前症候群（PMS）や月経困難症は現代女性特有の悩みということができる。先行研究より、低用量ピルは月経に伴う症状の緩和に有効であると証明されている。しかし、女子大学生や薬学生を対象とした先行研究でPMSの症状や低用量ピルの知識が少ないことが明らかになっている。教員を目指す大学生に、性に対する正確な知識がないことは、現代の女子児童・生徒に不適切な対応・望ましくない影響を与える恐れがある。

本研究の目的は､教員を目指す大学生の性の知識について、低用量ピルの効用とリスクに着目しながら明らかにすることである。また教員以外の職を目指す他学生との比較を踏まえて､今後の課題について、明らかにすることである。

２．研究方法

1)　対象者：金沢大学人間社会学域学校教育学類の学生（調査当時3年）と同大学の他学域・学類の学生（調査当時2年生～4年生)。内訳は教員志望者88名、教員以外79名であった。

2)　調査方法：学校教育学類の学生には、無記名の質問紙調査票を配布した｡他学域･学類の学生には、Google社が提供するサービスであるGoogleフォームを利用し､作成したアンケートのURLを添付して、調査の依頼を行った。

3)　分析方法：調査項目と男女別および教職志望有無別の関わりを調べるために、クロス集計およびカイ2乗検定を行った｡また平均知識得点の比較には、t 検定を行った。知識項目と男女別および教職志望有無別の関わりを調べるために、ピアソンの相関分析を行った。

３．結果と考察

1)　性に関する一般知識得点について、学校で学習する機会のある知識については、全体として正答が多かった。しかし、それ以外のいくつかの項目で教員志望者の方に誤答が多く、平均知識得点も低かった。また性に関する会話も少ないという結果より、教職志望者の性に対する視野や認識に偏りがあるため、関心が低いという結果になったと考えられる。

2)　性に関する2つの知識得点について、女性特有の悩みや低用量ピルの月経随伴症状への効果などの近年の性情報・性課題に関して、男性に誤答が多かった。また「分からない」が男女とも約半数～7 割はいることより、顕著な知識不足の状況が伺えた。現代の児童・生徒と関わっていく際に、性に対する正しい知識がないことは、苦しんでいる子、周りの子どもたちにも、悪影響を与える恐れがあると考えられる。そのため、教員志望者は、性に関する知識についてもっと知っておくべきであると考えられる。

3)　性情報獲得のきっかけについて、男女ともに性に関する自分の悩みや性の相談が性情報獲得のきっかけになっていることがわかった。これより、学校の授業等で性教育は受けているものの、性教育は、性の悩みを抱えたときの対処法や解決方法には至っていないことが考えられる。子どもたちが自分や相手の人生に責任をもち、お互いを大切にできるように、早期からの役に立つ性教育を進めていく必要があると考えられる。

４．結論

本研究では、性に対する知識に教職志望の有無で大きな差はなかった。むしろ教職志望者の方が知識が乏しく、関心も低いことが明らかとなった。近年の性課題については全体として知識が乏しく、低用量ピルの認識では男女に違いがあり、低用量ピルの月経随伴症状への効果を含めた多くの効用を知らない人が半数以上いることが明らかとなった。このような状況を改善するためには、本人の性に関する意識を変え、関心を持つことはもちろん、大学の養成課程および早期からの性教育の環境も大いに変えていく必要がある。